

市町村名	日南町
取組の名称	地域の力を使って様々な食を経験することで、地域のよさを見つける取組
<p>1 ねらい</p> <p>給食を通して地域の食材や、様々な食文化を体験することによって、食や食に関わる産業を始めとした日南町のよさについて、改めて考えるきっかけを作ることができるようにしたい。</p> <p>2 日時</p> <p>令和5年度（11月30日、12月7日、12月13日、1月25・26日）</p> <p>3 場所</p> <p>日南小学校・中学校</p> <p>4 対象</p> <p>小学生・中学生</p> <p>5 具体的な取組内容</p>	
<p>(1) ちまき作り体験</p> <p>毎年、町福祉保健課と連携し、小学5年生は日南町の食生活改善推進員の方々から、日南町の郷土食でもあるちまきの作り方を教えてもらっている。また、端午の節句や、菖蒲飾りなどについても話を聞き、地域の文化についても学習した。作ったちまきは、その時間に自分たちで茹でて食べた。</p>	
<p>(2) 生産者による講話</p> <p>日南町の繁殖農家の方に学校へ来ていただき、牛を育てる様子や苦労していること、仕事への思いなどについて、小学校ではにちなんタイムに、中学校では給食時間にお話をうかがった。牛が生まれてから肉になって、調理されて目の前に料理として出てくるまでには、直接生産に関わる人だけでなく、エサを作る人などの間接的に関わる人も含め、とても多くの人の手がかかっているということを知った。小学校では、その日の給食で食べた後ということもあってか、児童から質問が出るなど、関心が高い様子があった。</p>	  
	<p>小学5年生社会科の水産業の学習では、境港の水産業者の方に来ていただき、境港の水産業について講話していただいた。また、境港で水産業が盛んな理由の一つとして、近くに豊かな山林があり、山と海の豊かさには関係があるという話を聞き、水産業と日南町の主要産業である林業との関わりも確認した。魚釣りが好きな児童たちから質問があり、後日、資料とともに回答を送っていただき、鳥取県の水産業に対する理解がより深まった。</p>

(3) 交流都市の食文化を体験する取組

小学校では、にちなんタイムに友好都市であるモンゴルのゾーンモド市から来ておられる交流支援員ノミンさんから、モンゴルの食文化について話をしていただいた。モンゴルの気候や生活を始め、実際に食べているものや料理などについて話を聞いた。



小学1年生の児童から「ノミンさんが学校にきた日のつぎの日は、モンゴルのチャーハンがでたからすごくありがとうございます。」という感想があり、食文化の体験だけでなく、給食の作り手への感謝の気持ちを育むきっかけにもなった。

(4) 給食での体験

1月30日に、鳥取県産和牛を使った給食の提供を行った。牛肉の他、町内産のたけのこ等、日南町産の食材も併せて使用した炒め物料理にして提供した。肉質がとても柔らかく、少し甘辛い味つけとも相まって、好評だった。



1月2月13日に、今年から栽培が始まった日南町産有機にんじんを給食で使用し、炒め物料理で提供を行った。ちょうどその一月前に同様の料理を行い、にんじんの味を比較しやすいように提供した。

主に小学校の児童からは、いつも食べているにんじんよりもおいしい、味が違う、等の感想が多く聞かれ、日南町産食材の良さや、栽培方法の違いによる食材の味の違いを体験する機会となった。



1月26日に、モンゴル風の料理を取り入れた給食の提供を行った。給食の提供にあたって、事前に交流支援員のノミンさんからモンゴルの食文化について話を聞き、献立内容を相談した。現在のモンゴルで使われている食材等も考慮に入れつつ、できる限りモンゴルの食事を再現し、子ども達がおいしく食べることができるように話し合ったうえで、献立内容を決定した。当日の給食は、ノミンさんからもうまくできていると聞き、子ども達からも好評だった。



6 成果と課題

日南町内で食に関する産業に関わっておられる方を始め、様々な分野の方々に給食を通して関わっていただくことで、子ども達は多様な食を体験することができた。特に、ちまきは長年継続されていることもあり、子ども達は日南町の郷土料理の一つとして認識しており、小学校上学年で14%、中学生で6%の子ども達が日南町の郷土料理として挙げていた。また、町内の方々に関わっていただくことは食への意識を高めたと考えられ、特によく残っていた副菜の残食は、昨年度

13.7%に対して、今年度9.6%と低下した。

一方で、課題として、地域の食文化の知識に偏りが見られた。日南町の郷土料理を正しく答えることができたのは、小学校上学年で9%、中学生で42%であり、回答のほとんどが「おこわ」と「ちまき」だった。また、知識として知っていても作る等の実践には課題が見られた。例えば、ちまき作りはほぼ全員が小学5年生で経験しているにも関わらず、中学生でちまきを作ることができるという回答があったのは4%であった。今後も取組を継続し、地域の食文化や食に関わる産業への幅広い知識と、実践する力を身につけることができるようにしたい。